

スコットランド啓蒙における「学問の国」と「社交の国」 The ‘Dominions’ of ‘Learning’ and of ‘Conversation’ in the Scottish Enlightenment

坂本達哉
SAKAMOTO Tatsuya

1

「啓蒙」という言葉から普通に連想されるのは、フランスの啓蒙思想や啓蒙運動であろう。本文17巻、図版11巻からなる『百科全書』(1751-72)の編纂に結集した、ディドロ、グランベールら若き思想家たちの集団は、「ニュートンとロック」に代表されるイングランドの先進的な学問・思想の影響下に、フランス革命を準備する活発な活動を展開した。しかし、「啓蒙」の原語は、「(上から)照らす Enlightenment/Aufklärung」(英・独語)、「光 lumière」(仏語)であり、エリートの知識階級が無知蒙昧な大衆を教化するという含意をもつ。それは言葉の問題にとどまらず、政治・社会体制と思想との関係に由来する問題でもあった。絶対王政や領封制といった、前近代的政治体制のもとに展開したフランス、ドイツについてのみ「啓蒙」が語られ、すでに政治的近代化(いわゆる「市民革命」)を成し遂げていた18世紀のイングランドについて、その啓蒙がほとんど問題とされてこなかったのは、そのためである。

この意味において、スコットランドにおける啓蒙運動の独自性が注目に値する。それは一面で、立憲君主制と市民的諸権利を確立した、1688年の名誉革命後に展開した点において、絶対王政下に展開したフランス啓蒙とは、決定的に異なっていた。しかし他面において、スコットランドは、1707年にイングランドに併合され、社会・経済のあらゆる側面でイングランドの後塵を拝する発展途上「国」であり、フランス啓蒙と共通する社会的要素を内包していた。それは、“イングランドほど豊かではないが、フランスほど不自由でもない”という、名誉革命体制内でスコットランドが置かれた歴史的地位の問題であり、形式的な政治的先進性と実質的な社会的後進性との矛盾という、特有の歴史的条件が、そこにおける啓蒙運動の基盤を形成したのである(この点、より詳しくは、坂本達哉『ヒュームの文明社会—勤労・知識・自由—』創文社、1995年、第二章、一、を参照)。

以上の事実は、啓蒙運動における「知識人 *literati*」の役割において、スコットランドとフランスとのあいだに、決定的とも言える差異をもたらした。『百科全書』が、第1巻の出版後8年で発禁処分となった事実が示すように、フランス啓蒙の担い手たちは、絶対王政の二つの柱としての国家権力と教会権力に抵抗する、反体制知識人であらざるを得なかった。これに対し、同時代のスコットランドの知識人たちは、名誉革命体制のなかで、ほぼ完全な言論・出版の自由を享受していた。ヒューム(David Hume, 1711-76)は、『道徳・政治論集』(1741-42年)の論説「出版の自由について(Of the Liberty of the Press)」の冒頭、「何よりも外国人を驚かすことは、われわれがこの国において享受している、公衆に対してどんなことであれ伝えたいことを伝え、国王や大臣たちが取るいかなる方針をも公然と非難する、極端なまでの自由(the extreme liberty)である」と述べた(*Essays, Moral, Political, and Literary*, ed. by Eugene F. Miller, revised edition, Liberty Press, 1987, p. 9)。

スコットランドの知識人たちは、穏健なりベラリズムを特徴とするスコットランド教会の進歩的聖職者であると同時に、最先端の学問を積極的に取り入れようとしていたエディンバラ、グラスゴウ、アバディーンといった伝統ある諸大学の教授や学長であった。ハチソン (Francis Hutcheson, 1694-1746)、ブレア (Hugh Blair, 1718-1800)、ロバートソン (William Robertson, 1721-93)、ファーガソン (Adam Ferguson, 1723-1816) といった人々は、大学で高度の古典的教養を身につけた上で説教壇に上がり、一般の民衆に向かって、伝統的なカルヴィニズムとは異質な、人間本性と神の摂理への信頼にもとづく穏健主義の精神を説きつつ、各大学の講壇においては、道徳哲学 (Moral Philosophy) を中軸とする啓蒙哲学の精神を、体系的に講じたのであった。

このような教会と大学とを制度上の基盤として、スコットランド啓蒙の思想家たちは、名誉革命体制への政治的忠誠を内外に明示しながら、大ブリテンに統合されたスコットランド社会の近代化を企てた。「体制内改革」を推進するエリート知識人として、彼らが追求したものは、新しい近代社会＝文明社会の担い手たるべき市民＝国民の形成である。『百科全書』は、啓蒙の名のもとに、「旧体制」の根本的変革＝「革命 revolution」を、少なくとも潜在的には指向していた。これに対して、スコットランドの啓蒙は、社会の「改革 reform」ないし「改良 improvement」を担うべき市民＝国民の形成を目指し、そうした市民＝国民によって形成される、文明社会の政治的・経済的・道徳的構造を社会科学的に分析するという課題を引き受けた。ここから、文明社会における知識人と一般市民との関係、および、両者を結ぶ媒体としての「書物」や「文体」の役割についてのスコットランド啓蒙独自の考え方が現れてくるのである。

ハチソン以降の多くのスコットランドの思想家たちは、哲学、政治、経済、歴史を論じる一方で、「修辞学 rhetoric」や「批評学 criticism」に少なからぬ関心を示し続けた。これらの学問は、アリストテレスから中世スコラ哲学、ルネッサンスの人文主義をへて、近代に受け継がれた、西洋の学問伝統の本質的な部分を構成していたが、彼らにとってこれらの諸学は特別の社会的・思想的意義をもっていた。すなわち彼らは、スコットランドが置かれた前述の歴史的環境のなかで、その近代化と文明化を実現するため、学問・思想の世界と一般市民が生活する日常世界とを、架橋し媒介する学問的・実践的方法を模索し、そうした作業に最も相応しい、「書物」と「文体」の理想的なあり方を追求するなかで、修辞学・批評学といった古典的学問の革新を企てたのである。

こうした、スコットランド思想家たちに共通の関心は、安定した収入源をもつ大学教授や聖職者を勤めた経験のない、いわば知の独立生産者としてのヒュームにとって、無縁であるどころか、なお一層特別の意義をもっていた。特定の地位に就かず、そこから得られる安定した報酬を期待できなかった文筆家 (a man of letters) を自認するヒュームにとって、生きることは書くことであり、書くことは書物売ることと同じであった。自らの書物が売れるためには、同時代の読者たちに親しみやすく、理解されやすい作品の内容と形式、そして文体が求められたのである。事実、数多いスコットランド啓蒙の思想家のなかでも、ヒュームほど、学問と現実社会との有機的交流の必要を方法的に自覚し、それを可能にする書物と文体の様式を、生涯にわたって執拗に追求した思想家はいなかった。ジョン・ロックの『人間知性論』(1690年)が、哲学的文体の模範として、なお隠然たる影響力をふるっていた18世紀において、「ヒュームはおそらく、彼の文体 (style) におきまりの注意以上のものを払った、最初のブリテンの哲学者であった」(J. V. Price, "The reading of Philosophical literature", Isabel Rivers ed., *Books and their Readers in Eighteenth-Century England*, Leicester University Press, 1982, p. 176) と、言われるゆえんである。

「文筆家」として生きることを早くから心に誓ったヒュームにとって、同時代のより多くの読者に受け入れられ評価されるような哲学的・社会科学的作品を書くことは、生活の糧を得るための人生の知恵であっただけではない。それは何より、そうした高度の哲学や社会科学を自分のものとして消化しつつある、新しい読者公衆のあり方を彼自身が理解することの必要を意味した。さらにそれは、知的に洗練されつつある読者公衆をその内部から生み出す、文明社会の歴史的位相を社会科学的分析するという、思想の方法の問題でもあった。ヒュームにはこの系列の、じつに興味深い作品群があるが、以下では、『道徳・政治論集』にふくまれた短い論説、「エッセイ論 (Of Essay Writing)」に注目したい。

2

文明社会における著者と読者とのあいだの思想伝達のあり方を考える場合、避けて通ることの出来ない問題が、ヒュームが想定していた読者層の問題である。彼は、一体どのような人々を、自らの理想的な読者とみなしていたのだろうか。ここで注目されることは、ヒュームが、「動物的な生活 animal life」に明け暮れている貧農や労働貧民を、自分の理想的読者像から、明確に排除していることである。文明社会において人口の最大部分を占めるこの階層は、毎日の生活に追われ、ゆとりある社交や知的な会話を楽しむ物質的基盤を欠いており、ヒュームが主題とするような高度に知的な作品の読者とはなり得ないというのである（この点の詳細は、坂本達哉「一八世紀文明社会と中流身分のアンビバレンス」、野地洋行編著『近代思想のアンビバレンス』1997年、御茶の水書房、を参照）。

ヒュームの文明社会像、あるいは、その担い手としての読者層の中心は、彼が、「人類の上品な部分 the elegant part of mankind」と呼ぶ、ロンドン、エディンバラ、グラスゴウなどの大都市における、指導的な諸階層に置かれていた。そして、それら諸階層は、二つの異なる構成部分からなっていた。それは第一に、貴族、ジェントリーからなる伝統的な上流身分であり、この階層は高い教育を受け、高度の教養を身につけた、理想的読者層である。しかし、この階層がどれほど知的に高度ではあれ、それは国民のごく一部分に過ぎず、この階層のみを読者層として想定することは、文筆家としての商業的成功をもとめるヒュームにとって、必ずしも賢明ではない。さらに、より本質的な意味において、この上流身分の人々は、基本的に、自らの勤労ではなく土地財産に寄食する階層であり、産業社会＝商業社会として発展する文明社会の真の担い手ではない。こうした階層に喜ばれる作品を書き続けることは、むしろ、自らの文明社会認識を曇らせるという、哲学者にとって致命的な帰結を招きかねないと、彼は考えていた。

そこで、ヒュームは、上流身分にもまして知的に先進的であり、自らの政治・経済活動をつうじて社会的に上昇しつつある、新興の諸階層（商工業者、法律家、ジャーナリストなどの専門職）を、自分の最適な読者層であると考えたように思われる。これらの人々は「中流身分 the middle station of life」と呼ばれ、生活苦に追われる労働貧民とは違い、自ら勤労しつつも、社交や読書、芸術鑑賞などの楽しみをも享受する経済力をもつ階層であり、「勤労・知識・人間性 industry, knowledge and humanity」の連鎖を原動力として発展する、ブリテンの文明社会の主要な担い手であるとされた。彼らこそは、日々の職業生活から生まれる生き生きとした問題関心を、洗練された学問の言葉で捉え直そうとする、広範で知的要求の高い読者層であった。

こうしたヒュームの展望には現実的な基盤があった。それは、18世紀の初頭からロンドンを中心に急速に発展した、コーヒーハウスやクラブといった、名誉革命体制を各方面で支え推進する社会的交流の場の存在である。18世紀の中頃には、スコットランドの政治と学問の中心と

なったエディンバラや、商業の中心地グラスゴウにも、新興諸階層の交流の場が多様な形態で出現しつつあったが、ロンドンと比較した場合のスコットランドの特徴は、クラブがより高度な学問的議論の場（「協会 society」）として組織されたことである。代表的なものとしては、より初期の「ランケニアン・クラブ The Rankenian Club」を別として、「選良協会 The Select Society」「エディンバラ哲学協会 Philosophical Society of Edinburgh」「グラスゴウ文芸協会 Literary Society of Glasgow」などがあり、ヒューム、スミスらはいずれも、これらの組織の主要なメンバーであった。

ヒュームはさらに、伝統的な上流身分とこの都市部の新興諸階層を、「学識ある人々 (the learned)」と「社交的な人々 (the conversible)」に分け、両グループの人的交流をつうじた有機的な知識の交換が、文明社会の知的・道徳的基礎を形成すると主張する。中世から前世紀にかけては、聖職者養成機関としての大学や修道院が独占していた学問の世界と、宮廷を中心とする王侯貴族の社交の世界とは相互に隔絶し分断され、スコラ学を中心とする体制的な諸学問は、生きた現実との接点を失った嘘学に墮していた。これに対応して、宮廷の社交も貴族社会のゴシップに終始する、知的には無内容なものであった。デカルト、ホップズ、ロックといった、17世紀の近代思想の推進者たちが、程度の差はあれ、いずれも亡命者として権力の中核から排除された人々であり、母国の宮廷や大学から離れた、オランダ、フランスといった異国の地で自らの思想形成を図った事実は、おそらく、偶然ではないであろう。

ヒュームはこうした学問と社交との分断された関係を、「前の時代の大きな欠陥」だと考えている。18世紀の幕開けとともに政治、経済、学問、芸術の諸領域で近代化が進むなかで、すくなくとも大ブリテンにおいては、もはや「社交」の世界は一部の王侯貴族の独占物ではなくなり、新たな文明の担い手としての中流身分のものとなりつつあった。ここでは、高度の学問的成果が、書物の形態で開かれた公共社会に受け入れられることにより、学問が社会に対して文字通りの啓蒙的機能をはたす一方、学問それ自体も、現実社会の利害関心に積極的に対応するべく、その内容と表現形式とを変えていかざるを得なくなりつつある。ヒューム自身は、17世紀の偉大な先達たちと同様、大学の内部に活動の拠点を築くことはなかったが、その歴史的意味は、先達たちの場合とは大きく異なっていた。彼らが、大学の一般社会からの孤立によって、学問の革新のためにそうせざるを得なかったのに対し、ヒュームの場合には、大学自体が一般社会のなかに包摂され、とくにスコットランドにおいては、文明化の最有力の装置となっていたがゆえに、一般社会のなかに「文人」としての社会的基盤を確保しながら、自らの思想を大学の学問に逆浸透させることすら可能となりつつあるという展望を、そこに見ることができるのである。

こうした文明社会の新しい知的構造は、名誉革命後のスコットランドにおける歴史的環境の変化として、ヒュームを襲ったというだけではない。それは、彼の徹底した経験主義の哲学と有機的に連関する、思想の方法の問題を提起するものであった。「その推論のいずれにおいても、経験に決して相談したことのない人々や、その経験をそれが見いだされるべき場所、すなわち日常生活と社交 (common life and conversation) のなかに探し求めたことのない人々から、いったい何が期待できようか？」と彼は問いかけながら、自らの立場を次のように表現する。「私は、交際のなかで起こるあらゆることについての情報を、学識ある人々に伝達し、私の祖国のなかに、交際の役に立ち、楽しみとなる商品を見つけたならば、どんなものでも交際の国に輸入するように努力するであろう。貿易差額 (The Balance of Trade) をわれわれは警戒するには及ばないし、それを両方の側に維持することは何ら困難ではないであろう。この取引の原料は、主

として、社交と日常生活 (Conversation and common Life) によって提供される。それらの加工は、学問 (Learning) の仕事である。」(Essays, Moral, Political, and Literary, p. 535)。

ここで、ヒュームは自らを、「学問の国から社交の国に派遣されたある種の住人ないし大使 (Ambassador)」と表現している。そうした彼の使命は、「相互にこれほど大きく依存し合っている、これら二つの国家の交流を促進すること」であり、「幸運にもようやく開始されたばかりの、学問世界と社交世界との連盟」をより強化することであるが、「そうした目的にとって... エッセイ集という形式ほど有益なものはない」のである。こうした、貿易に関連させた経済 (学) 的な比喩が、比喩という以上の実質的な意味を持っていたことは言うまでもない。それは、文明社会が諸国民の自由で開かれた貿易によって発展する、商業社会であることを明示するものであり、そうした文明社会のなかで生きていく哲学者・思想家のあり方が、ひとつの理想像として、この言葉に込められているのである。

ヒュームの見るところ、それまで支配階級の内部で分断されていた、学問の世界と社交の世界の重心は、18世紀における文明社会化とともに、上流から中流へと下降しながら、着実にその社会的基盤を拡大し、この下降と拡大という同時進行的な過程をつうじて、学問と社交という二つの世界の交流が必然となる。上流と中流の区別、学問の世界と社交の世界の区別という、それまでの質的区別は完全に消失するわけではないが、もはや相対的な区別に過ぎなくなり、むしろ、中流身分を基盤とする「二つの国」の相互補完的な関係が、あらためて、重要な思想的意義をおびるようになるのである。

すなわちヒュームは、18世紀ブリテンにおける文明社会の知的構造を、1. 上流の学問、2. 上流の社交、3. 中流の学問、4. 中流の社交という、四領域のあいだの区別と関連において捉えている。彼自身は、第一に文筆業者であり、次いでは学問の国の「住人」かつ「大使」であるから、そうした社会的配置図における彼の居場所は、中流の学問の世界である。しかし、それは、上流の学問と社交、中流の社交という他の三領域との実質的交流をたえず保持し、時にはそれらと闘うという、開かれた根拠地であった。ヒュームが、代理大使、内閣事務次官などの高位の官職を経験し、上流の人々との広範な人間関係を維持する一方で、彼らの世界観に一致する、理性主義の哲学や理神論の神学に果敢な闘いを挑んだことが、それを示している。他方、ハチソンの「道徳感覚 the moral sense」やトマス・リードの「常識 the common sense」といった撰理主義や実在主義の立場が、中流の社交世界の実感・直感を洗練された形で理論化したものとすれば、それらに対する懐疑主義の視点をたえず保持しつつづけることが、ヒュームが考えた真の中流の学の特徴となるのである。

3

ヒュームはさらに進んで、こうした新しい「社交」世界の牽引車としての女性 (the Fair Sex) の役割を、高く評価している。「私は彼女らに敬意をもって接近する。そして、私の同国人である学識ある人々、頑固で独立心のつよい種族、が極度に彼らの自由を守ろうと躍起にならず、他人への服従に不慣れでなかったならば、彼女らの美しい手のなかに、文芸の共和国 (the Republic of Letters) に対する最高の権限をゆだねるべきところである。もっとも現状においては、私の使命は、われわれの共通の敵であり、理性と美との敵である、鈍った頭脳と冷え切った心情の連中に対しての、攻守を問わないある連盟 (a League) を欲することを超越するものではないが」(p. 535-536)。

この言葉には、女性の知的・学問的な能力と可能性についての、ある種の懐疑ないしは両義

的評価もかいま見えるが、全体として、文明化のプロセスにおける女性の積極的役割へのヒュームの期待は、明白である。女性独特の会話上手や社交術は、男性中心の古い宮廷社会では本質的な意味をもたず、観想的な修道院や大学では存在の場所すらなかった。これらの世界では、「鈍った頭脳と冷え切った心情の連中 (People of dull Heads and cold Hearts)」がすべてを牛耳っていたのである。近代においては事情が異なる。それらは、都市における知識の社会的交換と人間性の涵養にとって不可欠の手段であり、会話と社交の技術が、社会の文明化にとって、本質的な役割をはたすのである。こうした認識の背後に、フランスの啓蒙運動の一基盤となり、1763年の渡仏時にはヒューム自身も大歓迎を受けた、貴族やブルジョワの夫人たちが主催する「サロン」の存在があったことは、言うまでもない。

しかし、それだけではない。生涯独身のヒュームが、死を目前にして書いた『自伝』(1777年)のなかで、「私は、慎み深い女性たち (modest women) との交際をことのほか楽しんだので、私が彼女らから受けた応接に、不満のあろうはずもなかった」(“My Own Life” in *Essays, Moral, Political, and Literary*, pp. xl-xli) と回想したように、彼は上品で聡明な女性たちとの社交を終生好み、しかもそれを、自らの性格や思想の形成と不可分のものと考えていた。いくつかの恋愛エピソードを別としても、ヒュームの女性人脈は多彩であった。とくに注目すべきは、当時のロンドン社交界の中心的存在であり、女性主導の文芸クラブ「青鞥 blue-stockings」の指導者でもあったモンタギュー (Elizabeth Montagu, 1720-1800) や、ヒューム『イングランド史』(1754-62年)におけるウィッグ批判への反論として『イングランド史』(1763-83年)を著し、『教育書簡』(1790年)の著者として、フェミニズム思想の先駆者のひとりでもあったマコーリー (Catherine Macaulay, 1731-91) との、密接な交友である。

モンタギューは、いわゆる「オシアン問題」への関心から、1766年にスコットランドを訪問、ブレア・ドラモンドにあるケイムズ卿の邸宅で数週間を過ごし、エディンバラの知識人たちと交流した。彼女はそこで、フランスの知識人にも比すべき、彼らの明朗で知的な社交性に魅せられ、イングランド男性たちの「無知と野蛮」との対比で、「教養ある賢者にして田園の紳士、それはスコットランドでは洗練人 (a polite man) のこと」という感想をもらしたと伝えられている (Ernest Campbell Mossner, *The Life of David Hume*, second edition, Oxford University Press, 1980, p. 560)。

これらの女性たちは、中流と言うよりも、上流に属する人々である。しかし、ヒュームは、中流の学問世界が、中流の社交世界とのあいだに有機的交流を確立する上での、女性の積極的役割に期待していた。彼が、彼女らの社会的活動のなかにその例証を見出していたとしても、不思議ではない。言うまでもなく、「エッセイ論」におけるヒュームの問題は、女性の社会的役割それ自体というより、女性の社交術と会話術によって代表される、新たな「文体」のあり方であったのであるが、女性独自の性格や文明的諸能力の認識が、彼の問題意識に大きな触発効果をもったであろうことは言うまでもない (近年、ヒュームの知識論や道徳論を、「女性的なもの」の視点から読み直す試みが開始されている。一例として、Anne Jaap Jackson ed., *Feminist Interpretations of David Hume*, The Pennsylvania State University Press, 2000がある)。

ヒュームが、学問と社交という二つの世界の媒介者たる書物の社会的機能にふさわしいと考えるのは、「エッセイ」型の文体と表現形式である。文学形式としての「エッセイ」には、少なくともモンテーニュやベイコン以来の長い伝統があるが、ヒュームが直接の影響を受けたのは、一時代前のイングランドの思想家・ジャーナリストのアディソン (Joseph Addison, 1672-1719) の『スペクテイター』が開拓した独自の型と様式であった。デフォー、スウィフトなどとともに、

近代英語の基礎を確立したとされるアディソンは、とりわけ、スコットランドの諸大学における修辞学の基本テキストとされていたが、ヒュームにとっても、それは洗練された英語散文の模範であった。

もとよりヒュームは、イングランド型の洗練された文体や文章表現のみを、アディソンから学んだ訳ではない。そうした新しい文体が体现する思想の方法、すなわち、新たな文明社会の担い手としての中流身分を意識的に読者層として設定しつつ、現実の政治・経済・社会問題を公平かつ厳正な立場から論評する、上質なジャーナリズムの方法をこそ、彼はアディソンから学ぼうとしたのであった。同時にヒュームは、こうしたアディソンの方法と戦略に大いに共鳴しつつも、それが暗黙のうちに、イングランド中心主義的で名誉革命体制を絶対化する政治的イデオロギー（ウィッグ主義）にからめ取られていることをもするどく意識し、その克服を自らの主要な課題として設定していた（この点、詳しくは、坂本『ヒュームの文明社会』第二章、二を参照）。

その意味において、ヒュームが終生、「スコットランドなまり *Scotticism*」を自らの作品から徹底的に追放しようと努めたこと、親しい友人たちの新作に対して、同じ観点からの親切な添削や助言を惜しまなかったことは、興味深い事実である。それは、スコットランド啓蒙一般、とりわけ、ヒューム文明社会思想の本質的な一契機としての、「イングランド化 *Anglicization*」の問題を、言語の観点から示している。友人アダム・ファーガソンの『市民社会史』が出版され、評判となっていた1767年の3月、ロンドン滞在中のヒュームは、同書を読み終えたばかりのモンタギューに、とくにその文体について感想をもとめた。彼は、その書物の内容にも満足していなかったが、何より、ファーガソンの強いスコットランドなまりと晦渋な文体に、大きな問題を感じていたのである。この質問に対し、彼女は、「そんな文章をスコットランド人以外の誰かが書いたなど、ほとんどあり得ないことね」と答えたという。ヒュームは、このことを早速、共通の友人であるウィリアム・ロバートソンに、手紙で知らせている（*The Letters of David Hume*, ed. by J. Y. T. Greig, Oxford University Press, 1932, Vol. 2, p. 131）。

その前年にスコットランドを訪問し、そこでの知識人たちの洗練された社交的性格に感心したモンタギューのこの言葉は、スコットランド啓蒙一般、とりわけ、ヒュームにおける文体の問題がもつ両義性を示唆している。洗練されたイングランド型中流社交への同化をとりあえずの目的とするスコットランド訛りの克服と、イングランド的限界を超える真の中流の学の確立という、一見相反する思想課題が、ヒュームによる新しい文明的文体の追求のなかに、交錯しているのである。しかも、こうした追求を可能にする社会的基盤が、一般的にいえばイングランドに大幅に遅れをとったスコットランド社会の、一部とはいえ指導的な知識人層の社交世界にあった事実が、そこには端的に示されている。

上にふれたヒュームの四領域分析に即して言えば、アディソンの思想的役割は、自らは上流の社交世界に身を置きながらも、あらたに生成しつつある中流の学問の可能性を先駆的に追求したシャフツベリ（Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713）の思想を、興隆しつつある中流の社交の立場から批判的に継承したことであった。これに対してヒュームは、モンタギューの評言にふくまれた、アディソンが代表するイングランド知識人のある種の限界を打ち破るだけでなく、ハチソンらスコットランド啓蒙の先駆者による同一の試みに学び、さらにそれをも乗り越える形において、いわば真の中流の学問と思想を、独自の文明社会思想として展開しようと企てたのである。

ヒュームは、一般社会の現実から隔絶した、前世紀までの学問のあり方を根本から見直すな

かで、新しい文明社会に適した学問のあり方を追求した。しかしそれは、学問と一般社会との区別そのものを、無視することでも廃止することでもなかった。彼は、明確に自らの出自と根拠地が「学問」の世界にあることを明示しつつ、それと「社交」の世界との有機的交流の必要を説き、そのために必要な書物と文体との、革新的なあり方を提起したのであった。

(慶応義塾大学経済学部教授)